

亀山郁夫・沼野充義著
『ロシア革命 100 年の謎』
河出書房新社，2017 年

池田嘉郎

今も昔もロシアでは、政治と芸術が密接に結びついている。とくにスターリン時代のように、政治指導者と芸術家が組み合って新しい文明の創造に心血を注いだ時代にあっては、歴史研究と文学研究の成果が合流することでのみ、その全体像を語りうる。だが、これまで日本では、互いの領分に参入する意欲において、歴史家はやや抑制的であっただろう。¹ 文学者の方は、アンドレイ・シニャフスキー、カテリーナ・クラーク、ウラジーミル・パペルヌイ、ボリス・グロイスなど、文化研究の先達から刺激されながら、より大胆にロシア史を論じてきたのではないか。そうした文学者中、とくに精力的に仕事をしている二人が亀山郁夫と沼野充義である。² 本書はこの二人が、ロシア革命とその前後の 200 年について語り合った記録である。近現代ロシア史の 200 年を語るというのは力技だ。とかく新史料や新理論に目を奪われ、個別の問題に没入しがちな私たち後進に、「もっとスケールの大きな話を！」と呼びかけてくれているようである。

序章「ロシア革命とは何だったのか？」で、亀山が「ロシア語の単語を発するという行為を通して、ロシア人は一種の霊性のなかに入っていく」(16)と提起すると、沼野は「スラヴ人は『言葉の民』だと改めて言ってみたくなんです」「ロシア革命を指導したボリシェヴィキの職業的革命家は、レーニンを筆頭にして明らかに言葉の人たちでした。彼らの言葉が民衆の想像力と共振したという面があるんじゃないかと思うんです」(18, 30-31)と展開する。ここで言葉はロゴスに収斂せず、むしろ民衆の自然力と連動する。ユートピアと暴力が言葉を取り巻く。これが本書のロシア革命像である。

ドストエフスキーを中心とする第一章「農奴解放からテロリズムの時代へ」も、テロルから民衆のパトスを照らし出す(67)。チェーホフ中心の第二章「一八八一年からの停滞」

¹ 数少ない歴史家側の仕事では、和田春樹『農民革命の世界——エセーニンとマフノ』東京大学出版会，1978年，が最も重要であろう。

² 二人の仕事のうち、本書評にとくに関連の深いものとして、沼野充義「文化としてのスターリン時代」『朝日ジャーナル臨時増刊 変容する社会主義』1990年6月20日号、および、亀山郁夫『ロシア・アヴァンギャルド』岩波新書，1996年，をあげておく。

では、作家と自然の関わりが話題となる(87)。これは20世紀初頭の時点では、社会変革とその反面としての環境破壊という問題につながるのだが(90-92)、革命ロシアの200年を景観や風土から見直す可能性もここにはある。後の方(第一章)で亀山は「火力発電所や水力発電所をスターリンが造ったりしようが、その努力もすべてロシアの広大な領土に比すと途轍もなく小さい」と言い、沼野は「どんなに強大な国家を作っても、ある日恐ろしい自然力によってすべてが根本からがらっと崩れるかもしれない、という恐怖がどこか心の奥底に秘められている」と言う(303-304)。こういう視角を歴史学は取り入れるべきだ。³

トルストイを中心とする第三章「革命の縮図」は出色である。トルストイを「官能の肉の表現者」(106)と亀山が言うのは正当である。沼野が、肉への即物性には一般の約束事を引きはがす異化の手法がある、ドストエフスキーにもゾシマの遺体の腐敗に見られるように「即物的執着」がある(108-110)と応じる。亀山が「小説の真のリアリティというのは、自分が包まれている大きなオーラが破れちゃって、瞬間に陶酔が冷めてしまう。なに、何もないじゃないか、物しかないじゃないか、という即物的な瞬間の感覚や想像力を書き留めていくということこそ、もっとも純粋な文学芸術の手法と見ていたのかもしれないですね」(111)と述べる。既存のイデオロギーが破れ、剥き出しの物の世界が現れる現象は、ロシア革命、あるいは広大な空間が広がるロシアの本質に関わる。⁴

作家の出奔をめぐるやりとりも刺激的だ。沼野「ひょっとしたらチェーホフのサハリン行きのとけのように、自己を閉ざしてしまった閉塞状況からの不条理な脱出願望に従ったのかもしれない」亀山「トルストイ家そのものが帝政ロシアのマイクロコスモスだった」沼野「その家出の決断というか、破壊的なパトスは、ロシア革命のパトスそのものである」(114-115)。

第四章「世紀末、世紀初頭」と第五章「一九〇五年の転換」で、象徴主義やフォルマリズムが語られる。日露戦争の敗北により、ロシアは「神の死を経験した」と亀山は言う。日露戦争のロシア史上の位置を考える上で興味深い発言である。ただ、続けて亀山が「文学や芸術の世界で起きたキリスト教への幻滅と否定は、そのままロシア革命におけるロシア正教の禁止へと引き継がれていったと見ることもできますね」(131-132)と述べていることは、いっそうの検討を要する。第六章「一九一七年『ぼくの革命』」はマヤコフスキーから始まり、フォードロフのコスミズムの広がりが論じられる。死者の復活や宇宙開発などが読者にとってなじみの話題であるのは、亀山・沼野にくわえ、桑野隆や佐藤正則

³ 望月哲男を中心とする論集、『文化空間としてのヴォルガ(スラヴ・ユーラシア研究報告集4)』、北海道大学スラヴ・ユーラシア研究センター、2012年、も参照。

⁴ 中沢新一『はじまりのレーニン』岩波書店、1994年；新版2017年、も参照。

などの仕事によるところが大きい。⁵

第七章の題は「内戦、ネップ、亡命者たち」だが、1917 年の議論もここでなされる。亀山は「二月革命というのがそれまでの歴史における革命のイメージだったわけですね。ですからいわゆる十月革命あるいはボリシェヴィキ革命と呼ばれるものは一種、それまでの歴史の地平を突き抜けてしまう」（173）と言い、沼野は『ソ連』という国名自体に、壮大な虚構が含まれていたといってもいい」（175）と言う。どちらも歴史家が応答すべき指摘である。沼野はまた、憲法制定会議解散こそが「本当の革命の瞬間」と強調する（180）。事件史の評価としても大事な論点だが、そこからさらに、レーニンの行為を「虚無への跳躍」（187）と呼ぶのは印象深い。

1920 年代について亀山は、「アヴァンギャルドというのは [...] 現実には背を向け、ひたすら芸術の革命に献身した、きわめて罪深い運動」（188）と手厳しい。他方、30 年代について沼野は、「社会主義リアリズムの精神の下で、大形式の伝統がよみがえった」（197）と評する。アヴァンギャルドを政権に抑圧された悲劇の主人公と見ず、社会主義リアリズムを単なる統制政策とも見ない。ここには過去 30 年ほど、文学者が進めてきたソ連文化史の見直しの成果が端的に反映されている。⁶

第八章「スターリニズムの恐怖と魅惑」で亀山は、「でもショスタコーヴィチの音楽と二千数百万の犠牲者を天秤にかけることはやはりできないだろうと思うところがあって、根本的に、ロシア革命は間違っていたという思いを強くします」と真情を吐露する。教会も景観もすべて破壊されてしまった、と。沼野は「でもね、ロシア革命があったから今のロシアがそうなっちゃったというより、ロシアはもともとそういう国だから革命も起こった、とは考えられませんか」とそっけなく応える。無論、沼野が冷淡なのではない。「僕も亀山さんも口幅ったいことを言えば、ほとんど一生をかけてロシアに関わってきた人間ですよ。決していい加減な思い付きを言っているわけではないんです」（226-227）と熱く啖呵をきっている。

明らかに亀山の方が、伝統的なロシア革命像——人間の解放や社会主義と結びついた——への思い入れがずっと強かったのであろう。だからこそ亀山は、ロシア革命の暴力性が今日論じられるに至り、贖罪の必要を感じているのである。第六章でも亀山は、革命と罪の問題に言及している。フォードロフの復活思想がソ連で広い影響をもったことに関して、「革命のために人命が失われたということの全体としての罪の意識、革命を成就した

⁵ 桑野隆『バフチンと全体主義——20 世紀ロシアの文化と権力』東京大学出版会、2003 年；佐藤正則『ボリシェヴィズムと＜新しい人間＞——20 世紀ロシアの宇宙進化論』水声社、2000 年。

⁶ 他の注であげた文献に加え、浦雅春「社会主義と文学——社会主義リアリズムの消滅」川端香男里他編『スラブの文化（講座スラブの世界 1）』弘文堂、1996 年、256-290 頁；イーゴリ・ゴロムシトク（貝澤哉訳）『全体主義芸術』水声社、2007 年、参照。

側の集合的な罪意識をあらわしているんじゃないかということです」。ここでも沼野は「そこまで踏み込んで読めたらすごいことですよ」(162-163)とあっさり受ける。私もこれまで、ボリシェヴィキなり民衆なりが罪意識をもっていると感じたことはない。革命、さらに内戦は、動物的なレベルでの生き残りを賭けた闘争であった。罪意識はそこに介在しなかったであろう。また、そうした経験を経た人々の感性を、私たちの感性と同じように語れるとも思えない。だが、言うまでもなく亀山の発言は、一ロシア文学者の魂の軌跡を示すものとして貴重である。

第九章から第十一章は「ロシア革命からの100年」という題で、副題のみが違う。第九章の副題は「レーニンとスターリン」で、1920年代と30年代以降の違いがあるとすればそれは何かを論じる。この章は本書の白眉である。亀山は党中央委員会決定「文学芸術諸団体のペレストロイカについて」が出た1932年を転換点と見る。「僕は、ロシアの歴史が政治および文化の面でポストヒストリカル、つまり、歴史以後に入ったのが一九三二年だと思うんです」(231)。歴史以後とは「歴史以降の無時間」(128)であり、「本当の意味でのソ連文化は一九三二年に始まって、ゴルバチョフの登場と同時に終わる」(232)。これはグロイスの紹介者である亀山一流の指摘である。⁷ 沼野が、独ソ戦で「いやおうなしに、この『無時間』状態から外に引っ張り出されることになった」とこれも大事なことをつけ足すと、「でも鉄のカーテンによって[...]また再びポストヒストリーに帰ることができちゃった」(235)と亀山がまとめる。このポストヒストリー論は、その重要性にもかかわらず、歴史学において十分に取り上げられてこなかった論点である。⁸

沼野はさらに、20年代から30年代への転換を「自由から幸福へ」(243)と表現する。沼野一流のユートピアの類型論である。総じてソ連のエスエフ的、ユートピア的側面については沼野がよく感得してきたところだ。「そろそろレーニン廟のソ連文明にとっての意味をきちんと論ずるべきなんです」(169)とも彼は言う。他方亀山は、権力論、父権論に得手がある。「第一次五カ年計画の成功がもたらしたものというのは、家父長制的なものの再構築なんです」「歴史から脱して、非常に家族的な時間に引きこもっていく」(246)。これも見事な指摘である。

第一〇章の副題は「雪どけからの解放」である。スターリン批判と雪どけは、亀山によれば「ポストヒストリカルな時間の終わりの始まり」(275)である。もっとも沼野が言う

⁷ ボリス・グロイス(亀山郁夫・古賀義顕訳)『全体芸術様式スターリン』現代思潮新社、2000年。ポストヒストリカルな社会の端的な具象化は、プイリエフが描くトラクターもないソヴィエト農村であろう。田中まさき「戦前ソ連映画における農村の形象——И. ПУИРИЕВ『豚飼いと羊飼』を中心に』『SLAVISTIKA』21/22号、2006年、48-66頁参照。

⁸ 私の応答として、池田嘉郎「スターリンのモスクワ改造」『年報都市史研究』16号、2009年；同「記憶の中のロシア革命——ロム『十月のレーニン』とスターリン時代の革命映画』沼野充義他編『記憶とユートピア(ユーラシア世界3)』東京大学出版会、2012年、参照。

ように、ロシアの雪どけは「ちょっと解けたところで、また寒さがぶり返して、雪どけ水がまた凍りつき (...) かえって危険な状態になる」(273)。⁹ かくして亀山が言う通り、「プラハの春」を「なんとか食い止める」ことで、ポストヒストリカルな時間が再スタートする(278)。ヴィソツキーやオクジャワが「西欧的価値観からソ連文化を守っていた」と亀山が至言を吐けば、沼野は「吟遊詩人」が活躍するのはロシア人が「言葉の民だから」と序章に立ち返る(277)。同時代人としてソ連を知っている二人ならではの手堅さがある。第一章の副題は「ポストモダニズム以後」である。社会主義リアリズム、1970年代の非公式文化、ソ連崩壊後のポストモダンを、沼野はそれぞれ「ポストモダン1, 2, 3」と整理し、最後のものを『時間以後』の時代の祝祭と呼ぶ(299-301)。ここは沼野の独壇場である。

終章「ロシア革命は今も続いている」で、亀山も沼野も革命・内戦期について、大衆の暴力はボリシェヴィキの暴力をもって統制するしかなかったと語る(337, 341)。これは近年の革命史研究を受けとめてのことである。¹⁰ 亀山はここから再び贖罪論を展開する。「大戦で失われた人命の数と劣らない数の人間が内戦のなかで死んでいったという事実がありますから。思うに、これは革命が犯した原罪みたいなものです」「革命が犯した原罪を最初に自覚した瞬間、ソ連は終わってしまったんですね。原罪を自覚した最初の指導者はゴルバチョフです」「社会主義が約束する調和的世界への入場券を、レーニンに突き返すという覚悟にまで至ったのじゃないか、と思いますね」(338-339, 348)。沼野は亀山の贖罪論に一貫して懐疑的で(345-346)、私も沼野と同じである。ただし、亀山の説は文学的なビジョンとして力強い。

文学的ビジョンとしては、東欧革命やバルトの政変についての沼野の発言もいい。弾圧されてきた作家や音楽家がいきなり国のトップに躍り出る、まるで「カーニバル的転換」だと言うのだ。「ところがロシアは巨大すぎて、そんなカーニバルは起こしようがなかった」。これを受ける亀山の発言もいい。「ということは、現在もロシア革命と同じ状態だということになりませんか。すさまじい強権と、国民が潜在的に持っているカオス的なものへのものすごい願望というか」(349)。そうであればロシア革命とそれが目指した理念のことは、これからも語らねばならない。こうして対談は、ロシア革命に関する「語り」と

⁹ なお、ヴェーラ・アクサーコヴァが、1855年4月10日の日記で、アレクサンドル2世即位後の状況についてのチュッチェフの言葉に寄せて、似たことを書いている。「チュッチェフ Ф. И.は現在のことを見事に雪どけと呼んだ。まさしくそうだ。だが、雪どけの次に来るものは何か。もし春であり、恵みの夏であるならば、けっこうなことだ。だが、もしこの雪どけが一時的なものに過ぎず、あらゆるものが再びマロースによって凍りつくならば、ずっとひどいことになる」。Вера Аксакова. Дневники, письма. СПб., 2013. С. 182-183.

¹⁰ ウラジミール・ブルダコフ(池田嘉郎訳)「赤い動乱——十月革命とは何だったのか」池田嘉郎他編『世界戦争から革命へ(ロシア革命とソ連の世紀1)』岩波書店、2017年、参照。

その「詩学」の構築に向けた展望を示すことで終わりになる。

全体を振り返って四点、記したい。第一に、二月革命の見直し、また革命の「語り」の意義といった私のロシア革命論を、亀山も沼野も正面から受け止めてくれている（68, 172-174, 182）。これは大変ありがたいことであった。第二に、革命後、とくにスターリン時代のエロスについてはもう少し論じてもよかったように思う。言及されるとすれば、30年代にはホモセクシュアルが禁止されたなど、否定的な文脈である（243, 245-246）。しかし、家父長制的原理に回帰したにせよ、ソヴィエトの人間の創出は続いていた。性規範もまた、古いものと新しいものをあわせもったものとなっていただろう。亀山が、ダイネカの絵が「発する光には今もどきとさせられる」と言うとき、それは「大なる父のもとでの幸せ」の「幻想」だけによるのであろうか。¹¹

第三に、「もしもロシア革命が失敗に終わったら、今どうなっていたか」（326）という沼野の挑戦的な問いについてである。亀山は1918年のレーニン暗殺未遂事件を重要な分岐点としているようだ（327-330）。私も少し想像してみたのだが、容易な作業ではないことが分かった。基本的に、歴史学で「もし」を語るのは、実現した選択肢について、その重要性なり偶然性なりを際立たせるためであろう。そのため、実現しなかった選択肢（たとえば「もしコルニーロフ反乱が成功したら」）をメインストーリーに発展させていくのは、難しい作業なのである。

しかし、第四に、歴史家は従来とは違う観点から史実を捉え直すことで、オルタナティブ・ヒストリーに匹敵するような面白い叙述を行なうこともできるのではないか。本書のキーワードの一つである異化を切り口に、スターリン時代を書き直すこともできよう。たしかに亀山は「スターリンもまさに信念だったと思いますよ」（222）、沼野は「天才的芸術家」（253）と述べて、スターリンの資質と能力をよく評価している。だが私はさらに、ロシア革命の指導者ではスターリンこそが、物それ自体を直視し、暴露するという、異化の手法を最もよく体得していたのだと考えてみたい。レーニンとトロツキーは途中で脱落するので、虚無の空間で進む工業化、大テロル、第二次世界大戦と超大国化を指導者の立場から見つめ続けたのはスターリンだけである。第二次世界大戦を終えた時点で、彼にしか見えない光景があったはずだ。というのは「言語学の若干の諸問題に寄せて」（1950年）で彼は、「言語は土台の範疇にも上部構造の範疇にも入れられない」と言い切っているのである。¹² 言語であれ何であれ、土台にも上部構造にも属さないものがあるとマルクス主

¹¹ 革命後のエロスについては北井聡子の研究が重要である（たとえば、北井聡子「世界変容・ドグマ・反セックス——一九二〇年代ソビエトの性愛論争」『現代思想』2017年10月号）。*Венера Советская*. (M.: Государственный Русский музей, 2007) も参照。

¹² *Сталин И. К некоторым вопросам языкознания. Ответ товарищу Е. Крашенинниковой // Правда*. 4 июля 1950. С. 3.

義者が言うのは異例なことではないか。私はここに、物それ自体を見つめるスターリンの深い認識を感じるのである。

このように記したが、全て本書の二人の著者から私が学んできたことの延長線上にある。大事なことはスケールの大きな議論を志すことだ。そのことをこれまでずっと教えてくれた、亀山と沼野のそれぞれに私は言いたい。「そうだ、僕はあの人でさえも満足してくれることをやってみせるぞ...」。¹³

¹³ Толстой Л.Н. Полное собрание сочинений в 90 т. Т. 12. М., 1940. С. 295.